

演習問題 解答

第1回

第1問 (1) a, b を実数として, $z = a + bi$ とおく.

$$0 = z - \bar{z} = (a + bi) - (a - bi) = 2bi$$

より $b = 0$ である. すなわち z の虚部は 0 であるから, z は実数である.

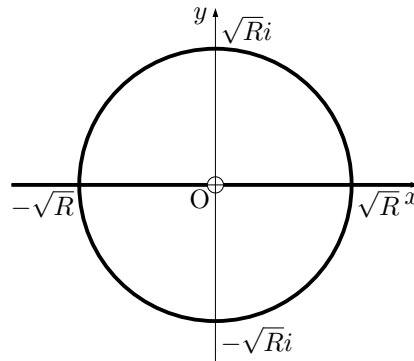
(2) (1) より, α が実数となる時, $\alpha - \bar{\alpha} = 0$ が成り立つ. $\alpha - \bar{\alpha}$ を計算すると,

$$0 = \alpha - \bar{\alpha} = \left(z + \frac{R}{z}\right) - \overline{\left(z + \frac{R}{z}\right)} = \left(z + \frac{R}{z}\right) - \left(\bar{z} + \frac{R}{\bar{z}}\right) = z + \frac{R}{z} - \bar{z} - \frac{R}{\bar{z}}$$

両辺に $z\bar{z}$ をかけて

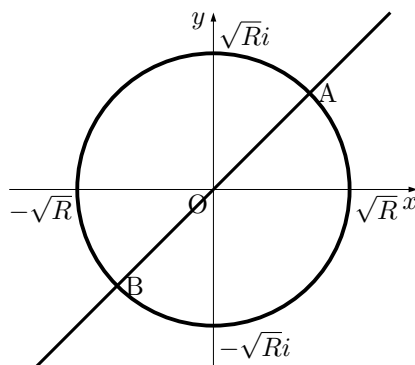
$$\begin{aligned} 0 &= z^2\bar{z} + R\bar{z} - z\bar{z}^2 - Rz = |z|^2z + R\bar{z} - |z|^2\bar{z} - Rz \\ &= |z|^2(z - \bar{z}) - R(z - \bar{z}) = (z - \bar{z})(|z|^2 - R) \end{aligned}$$

したがって, $z - \bar{z} = 0$ または $|z|^2 - R = 0$ が成り立つ. 1つ目の式は (1) で示した z の実数条件に他ならない. また, $R > 0$ であるから, 2つ目の式は $|z| = \sqrt{R}$, すなわち原点を中心とした半径 \sqrt{R} の円である. ここで, α の定義より $z \neq 0$ であることに注意すると, 求める z の全体は



上の図の太線部分, 半径 \sqrt{R} の円周および実軸上である. ただし, 原点は含まない.

(3) $|z - 1 - i| = |z - (1 + i)|$ は複素数 z と複素数 $1 + i$ との距離を表す. z は (2) の条件を満たし, かつ実数でないから, (2) の図の半径 \sqrt{R} の円周上にある. この円周上で $1 + i$ との距離が最大, 最小をとるとすると, z は原点および $1 + i$ を通る直線上であるから, 次の図の2点 A, B であることがわかる.



点 A を表す複素数は $\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}}i$, 点 B を表す複素数は $-\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}}i$ であるから, $|z - 1 - i|$ の最小値は, z が点 A にあるとき

$$\begin{aligned} |z - 1 - i| &= \left| \left(\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - 1 \right) + \left(\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - 1 \right) i \right| \\ &= \sqrt{2 \left(\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - 1 \right)^2} = \left| \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} - 1 \right| \sqrt{2} = \left| \sqrt{R} - \sqrt{2} \right|. \end{aligned}$$

最大値は z が点 B にあるとき

$$\begin{aligned} |z - 1 - i| &= \left| \left(\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + 1 \right) + \left(\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + 1 \right) i \right| \\ &= \sqrt{2 \left(\frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + 1 \right)^2} = \left| \frac{\sqrt{R}}{\sqrt{2}} + 1 \right| \sqrt{2} = \sqrt{R} + \sqrt{2}. \end{aligned}$$

第 2 問 (1) $BC = 2\sqrt{2}$ であるから, この正四面体の 1 辺の長さは $2\sqrt{2}$ である. すべての面が正三角形であるから, この立体上の任意の頂点 X, Y, Z に対して

$$\vec{XY} \cdot \vec{XZ} = 2\sqrt{2} \cdot 2\sqrt{2} \cdot \cos 60^\circ = 4$$

が成り立つ. よって

$$4 = \vec{AD} \cdot \vec{AC} = (x - 3, y - 5, z) \cdot (0, -2, 2) = 2y + 2z + 10 \quad \text{より} \quad z = y - 3$$

$$4 = \vec{AD} \cdot \vec{AB} = (x - 3, y - 5, z) \cdot (-2, -2, 0) = -2x - 2y + 16 \quad \text{より} \quad x = 6 - y$$

を得る. また, $AD = 2\sqrt{2}$ であるから,

$$8 = AD^2 = (3 - y)^2 + (y - 5)^2 + (y - 3)^2 = 3y^2 - 22y + 43 \quad \text{より} \quad (3y - 7)(y - 5) = 0.$$

$z > 0$ より $y - 3 > 0$ であるから, $y = 5$ である. したがって, $x = 1, y = 5, z = 2$.

(2) 正四面体の 1 つの面の面積は $2\sqrt{3}$ である. また, 点 A から辺 BC に垂線をひき, BC との交点を H とすると, $AH = \sqrt{6}$ である. 正四面体の内接球は各面の重心で接するから, $\triangle ABC$ の重心を G とすると, $HG = \frac{1}{3}AH = \frac{\sqrt{6}}{3}$. $DH = \sqrt{6}$ であるから, 三平方の定理より, $DG = \frac{4\sqrt{3}}{3}$. したがって, 正四面体の体積 V は

$$V = \frac{1}{3} \cdot 2\sqrt{3} \cdot \frac{4\sqrt{3}}{3} = \frac{8}{3}.$$

となる。ここで、球 S の半径を r 、中心を T とすると、立体の体積について

$$\begin{aligned} V &= (\text{四面体 } TABC) + (\text{四面体 } TABD) + (\text{四面体 } TACD) + (\text{四面体 } TBCD) \\ &= \frac{1}{3} \cdot 2\sqrt{3} \cdot r \times 4 = \frac{8\sqrt{3}}{3}r \end{aligned}$$

である。したがって、 $r = \frac{1}{\sqrt{3}}$ 。

また、球 S の中心から平面までの距離は、正三角形 PQR を底面に見たときの四面体 $TPQR$ の高さである。点 P, Q の座標はそれぞれ三角形の重心であって

$$P\left(\frac{7}{3}, \frac{11}{3}, \frac{2}{3}\right), \quad Q\left(\frac{5}{3}, \frac{13}{3}, \frac{2}{3}\right)$$

であるから、 $PQ = \frac{2\sqrt{2}}{3}$ である。 $TP = r = \frac{1}{\sqrt{3}}$ であったから、 DG の長さと同様に求めると、求める距離は $\frac{\sqrt{3}}{9}$ 。

- (3) 直線 DT を x 軸、点 T を原点としてみると、求める体積は $y = \sqrt{\frac{1}{3} - x^2}$ と直線 $x = \frac{\sqrt{3}}{9}$ および x 軸によって囲まれた領域を x 軸の周りに 1 回転させて得られる立体の体積であるから、

$$\pi \int_{-\frac{1}{\sqrt{3}}}^{-\frac{\sqrt{3}}{9}} \left(\sqrt{\frac{1}{3} - x^2}\right)^2 dx = \frac{28\sqrt{3}}{729}\pi.$$

- 第 3 問 (1) 奇数が書かれた玉は 5 つの中の 3 つだから、 $P_1 = \frac{3}{5}$ 。また、 $n \geq 2$ のとき、 n 回目の和が奇数になるためには、 $n-1$ 回目までの和が奇数で、かつ n 回目に偶数を引くか、 $n-1$ 回目までの和が偶数で、かつ n 回目に奇数を引けばよい。ここで、 $n-1$ 回目までの和が奇数である確率は P_{n-1} 、偶数である確率は $1 - P_{n-1}$ と表せるから、

$$P_n = \frac{2}{5}P_{n-1} + \frac{3}{5}(1 - P_{n-1}) = -\frac{1}{5}P_{n-1} + \frac{3}{5}$$

が成り立つ。したがって、 $\{P_n\}$ についての漸化式

$$P_{n+1} = -\frac{1}{5}P_n + \frac{3}{5}, \quad P_1 = \frac{3}{5}$$

を得る。

- (2) (1) で得られた漸化式は

$$P_{n+1} - \frac{1}{2} = -\frac{1}{5}\left(P_n - \frac{1}{2}\right)$$

と変形できる。数列 $\{P_n - \frac{1}{2}\}$ は初項 $P_1 - \frac{1}{2} = \frac{1}{10}$ 、公比 $-\frac{1}{5}$ の等比数列であるから、

$$P_n - \frac{1}{2} = \frac{1}{10}\left(-\frac{1}{5}\right)^{n-1}$$

ゆえに

$$P_n = \frac{1}{10}\left(-\frac{1}{5}\right)^{n-1} + \frac{1}{2}.$$

である。また、 $\left|-\frac{1}{5}\right| < 1$ であるから

$$\lim_{n \rightarrow \infty} P_n = \frac{1}{2}.$$

(3) (2) より $\alpha = \frac{1}{2}$ であるから,

$$\begin{aligned}\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \left(\frac{Q_k}{Q_n} \right)^{\frac{1}{n}} &= \lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \left(\frac{\frac{1}{10} \left(-\frac{1}{5}\right)^{k-1}}{\frac{1}{10} \left(-\frac{1}{5}\right)^{n-1}} \right)^{\frac{1}{n}} = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \left\{ \frac{(-5)^{n-1}}{(-5)^{k-1}} \right\}^{\frac{1}{n}} \\ &= \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \{(-5)^{n-k}\}^{\frac{1}{n}} = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n (-5)^{1-\frac{k}{n}}\end{aligned}$$

である. 区分解法を用いれば

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n (-5)^{1-\frac{k}{n}} = \int_0^1 (-5)^{1-x} dx = \left[\frac{-(-5)^{1-x}}{\log 5} \right]_0^1 = \frac{4}{\log 5}.$$